# Don't die

神谷　有志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｏｎ'ｔ　ｄｉｅ

【Ｎコード】
Ｎ７７８１Ｊ

【作者名】
神谷　有志

【あらすじ】
時は２０１７年、佐久間優二（サクマ ユウジ）２３歳四年制２流大学を卒業後、一旦は外資系証券会社に勤務するが、一身上の都合により３ヶ月で退職後、フリーターとなる。国家の不経済により世界環境が刻一刻と変化する時代を生き抜くサバイバルアドベンチャー。

## プロローグ（前書き）

登場する人物・企業・国家等は現実のものとなんら関係のないフィクションですのでご注意下さい。

# プロローグ

「魔王、これで終わりだ。」

青い騎士の鎧をまとった男が腰に下げた剣を抜き上段に構える。

「ふん小癪な勇者よ、我が最大の魔法によって葬り去ってやろう。」

「世界は俺が守る！！！」

構えた剣からは眩い光が放たれ、勇者と呼ばれた男は一直線に魔王に向かっていく。

「ギガ・ゾーマ！！！」漆黒の法衣をまとった竜の頭を持つ魔王が手をかざすとそこから爆炎が勇者に向かってこだまする。

放たれた炎は左手に構えられた伝説の盾によって切り裂かれ、道が出来る。

「悪よ、滅びろ！！！」上段に構えた伝説の剣を魔王に向かって振り下ろす。

「ぐおぉぉぉぉ～」雄たけびを上げ魔王は大の字に倒れこむ。

血を拭う様に左右に剣を振り高らかに剣を掲げる・・・

「これで世界に平・・・ワ・・・・・・・が・・・・・・・」

高らかに掲げられた剣先から胸元に目を落とすと魔王の尻尾が勇者の胸元を貫いていた。

「・・・グフっなぜだ・・・」血の滴る音と共に、金属の剣が石畳に落ちる効果音が流れる。

そのまま画面はブラックアウトし

「自分自身を守れぬ者が世界を守れるわけがないだろう・・・ハハハハ・・・・さらばだ矮小なる者よ」

魔王の声がこだまする。

保留ランプが一つ消え、画面のリールが回りだす。

その画面を食い入るように見つめ、パチンコ台のハンドルがはち切れんばかりに握り締めた男が叫ぶ。

「どうして！魔王が勝つんだよ！！勇者が何故負ける！！！」

手持ちぶたさな左手は魔王に怒りをぶつけるように画面に叩きつけられた。

「お客様、申し訳ありませんパチンコ台を叩かないで下さい。」

店員に冷淡な声をかけられ、我に返ったギャンブル狂の男は申し訳ないように肩を落とす。

「・・・・・これって大当たり確定の演出ですよね・・・」

おもむろにパチンコ台の脇に備え付けられた解説書の一説を指差す。
＜＜最後の戦い・☆☆☆☆☆・大当たり！？＞＞
「・・・・・あの誠に申し上げにくいのですが、大当たり確定ではないのでハテナマークがついております。
確定演出はそのとなりの＜＜世界の終わり＞＞という演出です。」
「そうですよね・・・そんな気がしました。確定演出で外れるわけがないですものね。」
回るリールと、銀色の玉がパチンコ台の釘に当たる安っぽいＢＧＭを聞くこと早三時間、やっとの思いでかかったチャンス
俺はそんなについてないのか・・・空っぽの財布と膨大な憂鬱を抱えパチンコ店をあとにする。

築１５年、ワンルーム６畳の部屋でテレビをつける。
『我が日本は未曾有の経済危機を向かえ、国債の発行額もついに１５００兆円を超え余談を許さない状況の中、
やはりというべきでしょうか、世論を後押しに８年ぶりに政権が交代しました。今後の経済対策について
新政権改革党、渡辺幹事長のインタビューの様子をお届けします。』

やや興奮気味の新進気鋭のスタジオアナウンサーが高らかに声をあげる。

「今後の経済対策よりも俺の財布をなんとかしてくれよ。」

畳に引かれた万年床というべき布団に倒れこむと眠気が襲ってきた。

昨日の夜間バイトから一睡もしていない彼のまぶたは重く、閉じられ泥のように眠りについた。

『・・・本日もご視聴ありがとうございました。明日は新内閣発足についての特集を行います。

これにて２０１７年９月３日、日曜の放送を終了します。明日も良い一日を・・・』

軽く会釈をするアナウンサーの口角は皮肉でもこもっているように上がっている。

## プロローグ（後書き）

次回：始まり

## 始まり（前書き）

登場する人物・団体・国家等は現実のものとなんら関係のないフィクションですのでご注意下さい。

## 始まり

『君の目にうつる世界は～なに色なのかな～♪』

つけっぱなしのテレビからは、赤ちゃん用の紙おむつのＣＭの曲がながれている。

優二は床ずれを防ぐため寝返りを打つ。

画面には母親扮した売れっ子女優のもとによちよち歩きで近づく赤ん坊の姿が映し出されていた。

『君の目にうつる世界は～なに色なのかな～♪』

「黒だよ・・・」と呟く。

佐久間優二（サクマ ユウジ）２３歳四年制２流大学を卒業後、一旦は外資系証券会社に勤務するが、

会社の傲慢な上司に逆切れし、３ヶ月で退職させられ、その後通販会社のメガ物流センターでパートとして働く。

東京ドーム１．５倍の敷地には２０万点の商品がＩＣタグにより管理され、注文によりＳＴというハンドターミナルで

その商品を探し出し、梱包、発送する作業である。

優二は、毎夜単純な宝探しゲームの作業に従事していた。＜５１４

３－２９＞という数字が表示され、その後
番号の棚を自ら探すことすらなく、ＳＴの示す矢印に従うだけでその商品までたどり着くシステムである。
１００人近い老若男女が肩からガマ口のように開いたバックを肩から提げ、左手のＳＴをじっと見つめ
黙々と練り歩く光景はあまりにも異様な雰囲気をかもしだしていた。
優二もはじめはその異様な異質な空間に嫌気が差しそうだったが務め始めて早２ヶ月、嫌気どころか
居心地の良ささえ感じ始めていた。ある一定数をこなすと休憩になるが、シフト制もありあまり
人と時間が被ることさえない。２１時から翌６時までの会話をすることさえ稀である。
『こんばんわ、それでは１８時のニュースをお知らせします。』
優二は、おもむろに気だるい上体を起こし立ち上がる。
洗濯層に溢れんばかりに放りこまれた中からまだ着れそうな服をひっぱりだすと、
あちこちにシミができた黒のスエットを脱ぎ捨て、袖を通す。
『渡辺幹事長、今後の日本はどうなるのでしょう?政権交代により景気は良くなるのでしょうか??』

テーブルに置かれた、黒いソフトケースからタバコを一本取り出す。

『ご安心下さい。そのための政権交代です。私が今の世の中、世界を変えてみせます！国民の生活を守ってみせます！！』

灰皿のある台所に行き、火を付けると共に古びた換気扇を回す。

『心強いお言葉ありがとうございます。幹事長お言葉ですが、生活っていうのは略語なのですが、略さず言うとなんと言うかもちろんご存知ですよね。』

タール９ｍｇの煙を強く吸い込む。

『・・・会見は以上だ。』

鼻から体内の蓄積された憂鬱とともに白濁の煙が放出される。

『会場から生中継でお送りしました。スタジオにお返しします。』

後２吸いは出来るほどの長さを残し、蓋つきの灰皿でタバコの火を消す。

『申し訳ありません。インタビュアーに不適切な発言があったことを心よりお詫びします。』

画面に映し出された深ぶかと頭を下げている新進気鋭のスタジオアナウンサーを尻目にテレビの電源を切る。

床に落ちた水深１００ｍでも壊れないソーラーパワーの電波腕時計を拾い上げ、左手にはめる。

「生命活動・・・」

優二は呟くと電気を消し、部屋を後にした。

## 始まり（後書き）

次回：出会い

## 出会い（前書き）

登場する人物・団体・国家等は現実のものとなんら関係のないフィクションですのでご注意下さい。

## 出会い

ＳＴ画面に”規定の工数が終了しました。休憩して下さい。次回作業開始時間は０１：２１です”と表示される。

優二はＳＴステーションと呼ばれる、緑や赤の数百のＬＥＤランプが灯る充電スタンド郡にＳＴを返却する。

丁度、そのとき３つほど離れた充電スタンドにもＳＴをはめるプラスティック音が聞こえ、そこには

歳の頃は２０歳前後だろうか幼さが残る髪の長い女性が立っていた。

やはりというべきか優二を気にとめる様子もなく、休憩所に向かう。

赤いスニーカー、細身のブルージーンズ、首元までジッパーを上げた大き目の黒のジャージを着込んだ女性の

残り香を追うように、優二は足をすすめる。

５０名ほどは座れる簡素な作りの休憩所兼食堂は、いつもと違った様相呈していた。

あたりを見渡すがさきほどの女性はいない。恐らく夜間は食堂が閉まっているため、

更衣室に弁当やらコンビニで買い込んだ昼食もしくは夜食をとりに行ったのだろう。

優二は、いつもより起きた時間が遅かったこともあるが、昨日の弱い勇者のせいもあり
自動販売機で昼食のパンを買うことにした。再び辺りを見渡すが彼女はいない。
自動販売機でジャムパンと温かい缶コーヒーを買い込み、更衣室に通じる扉が見える
席に着きそれらを口に運ぶ。
静まり返る食堂に扉の開閉音が響く。優二は残り3分の1はあろうかという貴重な食料を
頬張ると、生ぬるくなった缶コーヒーで流し込んだ。
恐る恐る扉のほうに目線を向けると、うつむき加減の彼女が扉から一番近い席に着き、
手作りなのだろうか、小さなお弁当箱を広げている。
優二は逃げるように更衣室の扉と逆にある扉から外にでていた。
赤缶と呼ばれる、ポリバケツ大の水の張った灰皿の前に座りこみ、なけなしの
タバコに火をつける。タバコをやめようと仕事中は吸わないと決めていたのだが

その決意はものの１週間でたたれ、相変わらずの意志の弱さを嘆くかのように

天の星々を見上げる。

「織姫と彦星っているのかな。」

一人暮らしが長く、社交的でない生活をしているとどうしても独り言が増える。

時計を見るといつの間にか０１：０９を指している。

普段なら重い腰も、軽く感じられ活きこみ食堂の扉を開く。

が、そこには彼女の姿はなく・・・

「やっぱり勇者は勝てないか、演出的には当たるはずもないのものな。」

そんな優二に一筋の光を当てるかのように先ほど彼女が座っていたテーブルに

小さな輝きが見えた。

## 出会い（後書き）

次回：はじめまして、私、明日菜って言います♪

## はじめまして、私、明日菜って言います♪（前書き）

登場する人物・団体・国家等は現実のものとなんら関係のないフィクションですのでご注意下さい。

## はじめまして、私、明日菜って言います♪

全自動洗濯機のけたたましい注水と回転音だけが響く6畳の天井に掲げられた一筋の光。

銀の光を放つ楕円形のブローチには、聖母マリアを思わせる刻印がなされおり、所々には黒ずみが見て取れた。

万年床に寝そべった優二はただただそれを見つめている。

外は快晴。時折、窓辺からは木漏れ日にも似た光が差し込みそれを一層神秘的なものに強調した。

もともと地方出身の優二は、高校卒業後そのまま地元の大学に進学するつもりだったが、

記念受験のつもりで受けた関東の大学に合格してしまい、親の強い勧めもありこの部屋に引っ越したのが

約4年半前。その当時付き合ってた決して美人とは言いがたいがスレンダーな彼女とは大学を卒業したら

結婚しようと約束していた。遠距離恋愛も3年ほど続いてはいたが、仮面カップルと揶揄されるほど冷え切って

いたため、いつの間にか自然消滅していたのだ。

卒業したら、地元の企業に就職してこつこつ働いて、小さな暖かい家庭が築けるものだと思っていた

優二にとって地元は後戻りできない地になっていた。

そんなとき、若くして高級外車を乗り回し、美人な女性をはべらかす証券マンたちをテレビの特集でみて

自分もこうなりたい、なれるのだと息巻いて大学の４回生の折は、講義にもでず図書館にこもっては

専門書を読み漁っていた。

金融経済は実物経済の１０倍のお金が動いている。コンビニやスーパーなので取引されるお金と物よりも

株や為替などお金とお金の取引のほうが１０倍もある。

実際問題証券マンにとって必要な証券外務員の資格も在学中にとり、国内２番目のメガ証券会社に勤める

ことになるのだが、仕事の内容と言えば良くも悪くともいえない商品・株券を買ってくれる

資産家・金主の所に幾度と訪れ頭を下げ金を出してもらうことであった。

その株が上がろうが下がろうが知ったことではない、とりあえず金を集める兵隊とかした

サラリーマンは、守るものがなければ不満は上司にぶつけられ自滅する。

だが、優二はそのケースにはあてはまらなかった。いつかは、自分が株価を操作し株式を公開する

主幹事にもなりえるという自負と夢と故郷からの煽りのハングリー精神の塊とかしていたのだが

いささか潔癖がすぎたのだ。仕手株と言うものが存在し、7年前、政治資金出資法がさらに改正

されたのをきっかけに選挙前に政治家の資金集めに大いに活躍することを知ってしまったのだ。

優二が担当したＩＴ会社は毎月月末２５日に自社の保有株を売りに出し３０日に同じだけ高値で買い戻す

のだが、その会社と政治家が直接やり取りをすると問題が起こるので優二が間に入っていた。

そんな事情も知らず、売れない売れないと騒ぐ同期を尻目に優二は楽して業績を上げていく。

入社３ヶ月目のある日、優二は他の政治家でない顧客にそのＩＴ会社の株を売ってしまったのだ。

チャートと呼ばれるグラフを分析し、財務状態を確認しまだあがると確信し優二自身の判断で

規定数より売って回る。これで、さらに同期に差をつけ出世できると思い上司に報告すると

別室に呼ばれ説教され、それに納得できず反論するとすべての事情を聞かされた。

会社の暗い部分を共有することは、出世の近道だと知っている上司はそれだけ優二の素直さをかっていたのだが、いかんせん優二は潔癖すぎたのだ。

全自動洗濯機の脱水音のみが響く6畳のワンルームの聖母は優二に微笑みを湛えているように見えた。

その聖母を首からかけると、ベランダに出て乾いた下着、シャツ、ジーンズ、上着を取り込むと

シミのついた黒のスエットを脱ぎ、着替える。

「救い・・・・・・かぁ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ST画面に”規定の工数が終了しました。休憩して下さい。次回作業開始時間は01：35です”と表示される。

優二はSTステーションと呼ばれる、緑や赤の数百のLEDランプが灯る充電スタンド郡にSTを返却する。

丁度、そのとき5つほど離れた充電スタンドにもSTをはめるプラスティック音が聞こえ、そこには

歳の頃は20歳前後だろうか幼さが残る髪の長い女性が立っていた。

「あの・・・これ・・・」

優二はそっと銀のペンダントを差し出すと

「・・・・・ありがとう・・・ございます・・・やっぱり佐久間さんが・・・」

それを恐る恐る受け取る彼女。

「えっ、・・・どうして名前を・・・」

「ネームプレート・・・」

目線を胸元にあげると、”剣菱(けんびし)”とゴシック体でかかれたネームプレートが

細く白い首から下がっていた。

驚嘆の声を漏らす優二に向かって、

「はじめまして、私、明日菜(あすな)っていいます♪」

と弾んだ声をかける。

静まりかえった巨大倉庫の異様な空間から隔離されたような別世界の形成。

黙々と、淡々粛々と作業をこなす人々でさえ足を止めてしまう。

「ゆうじ・・・佐久間優二です。・・・よろしく。」

顔を上げるとそこには、少女の無垢な微笑みがあった。

**はじめまして、私、明日菜って言います♪（後書き）**

次回：バスケットボール

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7781j/

Don't die

2010年10月13日15時05分発行